

マーク・トウェイン著（金谷良夫訳）

『マーク・トウェイン スピーチ集』

（彩流社・2001年・本体3800円）

日本大学生産工学部助教授 木内 徹

本書は、彩流社から刊行されているマーク・トウェイン・コレクションの第17巻として出版されたもので、1860年代から1909年までの50年近くにわたってトウェインが折に触れて行った103回のスピーチを集めたものを日本で初めて翻訳したものである。

訳者の金谷良夫氏は、マーク・トウェイン一筋に研究を続け、トウェイン研究のメッカであるカリフォルニア大学パークレー校のマーク・トウェイン研究所の客員研究員も勤めた本格派トウェイン研究家で、まさに本書は訳者を得たと言ってよい。そのため、固有名詞の発音やトウェインの人生に関する事実関係については、綿密な調査に基づいているために信頼に足るものとなっている。従来、日本では作家ウィリアム・ディーン・ハウエルズ、トウェインの兄弟オリオンという表記が行われてきたが、金谷氏はハウエルズとオーリオンという表記に改めている。

さらに、本文中の〔 〕におさめられた注釈、および各スピーチの最後に付された後注は訳者によるもので、これが読者の理解を深める。たとえば、トウェインが晩年いつも白い服を着ていたことはよく知られているが、その理由として注釈には「白い服を着れば汚れた世界においてきれいでいられる」（p.99）と思っていたからだあって、白い服の理由に対する理解が深まるのである。トウェインは、「服装の改革と

著作権」という講演の中で、神から与えられた服、つまり裸であるハワイの原住民がこれまで見た服装の中で一番すばらしかったと言う。この痛烈な皮肉は、この注釈によって生きるのである。

あるいは、トウェインの葉巻好きについて、後注に「たいてい一日に四十本吸い、多少本数は減ったとはいえ、死ぬまで止めず、晩年はベッドで吸いその火を消すのを忘れることもあるほどだったという」（p.120）とある。この注釈に助けられて、「少女たちへのアドバイス」というスピーチの中で、「第一に、皆さん、たばこは吸わないでください—つまり、たばこを吸い過ぎないでください」（p.119）という少女たちのアドバイスがより滑稽に響いてくる。

またトウェインは、スペイン人の劇作家で「亡くなったとき四百の戯曲を後に残した」（p.175）人物に見習って、自分もその著作数を超えてやるという野望を持つのだが、それに付された後注に「恐らく劇作家、詩人ローペイ・デ・ベガ（一五六二—一六三四）のこと」（p.177）とあって、こうした注釈がなければ読者はこのスペイン人の劇作家が誰であるか容易にはつきとめられないであろうことが想像される。

こうした事実の解説がなければこのスピーチ集のおもしろさは半減することだろう。そしてオックスフォード大学やミズーリ大学で名誉博士号を受けるところの写真

や、ビリヤードに興じる写真も読者の理解を助ける。しかしそうした補助的なものばかりではなく、トウェインのスピーチそのものの翻訳にも工夫がなされている。

それは、トウェインのユーモアをそのままに残すという努力にほかならない。スピーチという特性のため、ウィットやユーモアを漂わせることなくして、翻訳が成功したとは言えない。このことは「アメリカ人とイギリス人」というスピーチで成功している。これに付されたトウェイン自身による原注に、退屈で長い演説がいかに嫌われるかをユーモアたっぷりに皮肉っている。

シェンクというあるアメリカ人の将軍が、あまりに長い演説をしたので、それ以降の演説は時間切れとなってすべて割愛される。このトウェインのスピーチも、実は割愛されてしまって、実際は行われていないのである。原注はこう書かれている。

四十四の完成されていたスピーチが胚胎（はいたい）の地でなくなったことが知られている。その時以来晩餐会で君臨する憂鬱、暗影、勿体というもの、そこにいた多数の人々にずっと後まで残る記憶となったであろう。あの思慮を欠く言葉によって、シェンク将軍は、イギリスにいた彼の親友のうち四十四人をなくしたのであった。（p.424）

この件りこそ、トウェインの面目躍如たる部分であり、ただ単に長くて退屈なスピーチが嫌われるのは、洋の東西を問わないことを知らされ、読者にはやりとすることだろう。スピーチの無駄な長さを揶揄したトウェイン独特の言い回しを、ユーモアそのままに日本語に移し替えることに成功している例である。

あるいは「ニューヨークプレスクラブの晩餐会」の冒頭で、トウェインは司会者に「アメリカ文学の先頭に立ち、光彩を添える人」と紹介され、過度に褒められて大いに照れてしまう。こうしたことがいかに嫌いであるかを、「銃を家に置いてきたことを後悔し始めていると言わざるを得ないのでございます」（p.212）という、アメリカのおよびトウェインのジョークを使って表現する。ここで聴衆はどっと湧いたに違いない。アメリカでいま全盛のシチュエーション・コメディ（状況喜劇）の原型を見る思いである。

中でも特異なスピーチは、オーストリアのウィーンで行ったドイツ語のスピーチである。トウェインはそれを自ら英語に直訳しているので、語順や文法が意図的にゆがめられている。それを和訳すると「それでまた、なお、それでもまたささげる次第でございます私は心底からの感謝を」（p.58）のようになる。もとより語順や文法的に間違っている文章を日本語として多少とも意味ある文章に翻訳することは難しかったと察せられる。そのあたりの翻訳の苦勞を金谷氏は「あとがき」で、「困難を極めた」と言っている。

また本書の巻末に付されたデイヴィッド・パロウの「マーク・トウェインの個性とその時代」は、トウェインにとって講演は「彼の公的生活における基本構造の一部を成していた」ことを教え、「きわめて頻繁にスピーチを行うことをおのれの義務と考えた」ことを知らせてくれる。パロウが「近年、文学研究に対する付加物にすぎないものとして主題別の題材に対する偏見が放棄されて、文学自体、歴史的に特定の文脈を超越すると言うよりもむしろ、立証するものとして広く見なされるようになってきている」と述べているように、この『ス

『ピーチ集』はトウェインの残した『ハックルベリー・フィンの冒険』などの作品群とは別に、新たなトウェイン像を日本の読者にも提示することになるだろう。